
キセキの反乱少女

華山

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キセキの反乱少女

【Nコード】

N5876P

【作者名】

華山

【あらすじ】

自由とはなにか。自由とは罪か。わがままを通すのはいけない事か。

自身の願いを叶えることによる矛盾がいけないのか。
そんな考えがよく頭によぎるのです。

願いは遠く少女の願い、わがままとは…。

いつもの夢日常

誰かが聞いたらありえないというだろう。

でも、ここも現実の一つなのだから存在すると言っ、思っ。

わたしの目の前に広がっている町、世界は中にあるのだから。
今日も、ある男を待っている。

いつもの店のいつもの時間に待ち合わせ。

あざやかな夕日、静かな夜その二つしかない。

本当に不思議だ。

夢なのに現実みたいだ。

.....

そんな事はどうでもいいのにね。

あの朱色のコートは…きたか。

「遅い。」

言っと思し訳なさそうに笑いながら

「ごめん、ごめん。」

彼はルカ、ファミリーネームがないらしい。

いい奴だとわたしは思っている。

「やっぱり…怒っているよね?。ごめんな。」

イケメンらしいけど、わたしにはどうでもいい。

幼い頃からよく会っているしね。

本当に反省しているのかな。

まあ、

「怒ってないからいいよ。」

答えると困ったかのような笑い方をする。
解らない。どうして、そんな笑い方をするのかわからない。

「席にどうぞ。」

いうと、席のほうを見る。

首が疲れるし、名案というものだ。

「はいはい、わかりましたよ。お姫様。」

形式的な言葉をわたしに返してくる。

座った。

さて、どうしようか。

「どつという話がいい?。」

けっこの文化の違いで話が合わないのてこんな感じになっている。
だってここは夢の中なのだから、仕方がないのですが。
そして、思うからにたんに話のネタが無くなり出していたりもある。

「現実の…話がいいかな。」

遠慮がちに彼は言う。

眼をテーブルに向けて言う。

なぜかは、わからない。

彼とは、幼い頃から一緒に話をしたりするのが常だ。
なのに現実。

どうしても、理解ができないけどありえないネタだった。

「…現実かぁ。」

あんまり話したこともない。

あまりにも、プライベートすぎるネタだ。

でもわたしは、彼には芯がちゃんとある事に安心を覚えた。
うん、話そう。

「わたしの居る国は、やつと仮の平和に馴染めだした所。」

一言でいうならそうだ。

「それでも、裏の方じゃ未だに血生臭い話とかあるし、
ふつうに人体売買とかもしているよ。」

嘘ではない。

わたしのいる勝三区ではあまりないけど、
確実に横行している。

しかも、南の方では汚染が進行しており危険極まりない。

「良い所とかは?。」

的確な質問だ。

言うなら汚染が進んでない所だが、また聞かれると面倒だ。

「娯楽がそろっている事かな?。」

本当だ。

でも、裕福層位ではないとすべての娯楽を楽しめない。

わたしは普通だし。

ルカのほうを見る。あつ、目を逸らした。
ずるいよ?。

そっちから振ったくせに、変だよ。

「俺は、よくわからないな。」

…はい?。

とりあえずはいつも、注文しているメロンソーダを飲む。
この毒々しい真緑の液体がおかしくて好きだったりする。

「でってさあー。外を眺めたり、お仕事ばっかで嫌だし
どうして、望んでもないのに柱として生きていかなきゃいけないの
って話。」

それをノンプレスでいう。

かなりの鬱憤が溜まっているのかと納得する。
柱? 専門用語だと推測する。

町には出たこともないのだろう。

そうじゃないとおかしいし、前々から町の話の聞いたこともない。
きつと、通る程度で買物とかしたことは、ないのだろうと思った。

「本音で言うと

裏も表も同じな気がするし、どうこうとか解んないしな。」

わたしの方を向いている。

彼の目には、諦めとなにかが混ざり合っていた。
諦めた目自体はよく見ている。

なにかが解らない。

「生きたいって思っているんだけどなあー。」

困ったと言わんばかりに空を見る。
上を向いて空を見上げていた。

「こうして、エルデナと話したり買い物したいってのが本音かな。」

ぼやく程度に言う。

生きたいというのが本音だろうか。

わたしには何も感じない。

人を見ても、人が赤く染まっただけでも感じはしなかった。

わたしはどこか壊れているのだろう。

ル力が羨ましく、感じた。

「ん…、明るくなってきたね。」

んー！と背伸びする。

ふたたび、わたしと目が合う。

「こうやっていて思い出すねー。」

何のことだろうか。

考えても、思い当たらない。

あの銀色鎖のブレスの事なのか、それとも短剣の事なのか
この二つしか思い当たらなかった。

「何を思い出すの？」

彼、ルカとの思い出はかなり濃いから、どれか思い出せないと言
う素振りをする。

ゆっくり思い出すとかなりの数が出てくる。

印象に深いのは

銀色鎖のブレスの事、短剣の事位だ。

「ん？、始めて会った頃だよ。」

にこりと笑うが眼には光がなかった。

あの時のわたしは、かなり病んでた風だったと思い出した。

たしか、あの時は殴られたよな。

エルデナがほかの男にね？。

覚えてる？。

やたらと、不思議そうに殴られた奴らの顔をみていたよねー。

んでさ、俺がそいつらを切り刻んでどっかに置くと

エルデナは聞いたよね？。

『なぜ痛いのか？。』

って感じでさあ。

くわしく、言えだ？。

無理無理、思い出しなよ。

で、次の言葉を思い出せそう？。

.....

はい、タイムアップ。

答えは

『夢だったら、痛いわけがないじゃん。』

でしたー。

俺のセリフだぜ。

え？。なんで昔の事を覚えているかって？。

唯単に印象深くってアルビノじみたその容姿だからだよ。

しかも面白くってさあ、どうしてそんな事を聞くのかなって思ってた。答えたらまたとんでも発言してさあ。

俺はね、その時に確信したんだよ。この子と居れば退屈はしないってさ。

んで、脅すと誘って、マジで驚いたよ。

本当に笑えた。

「しかし、まあーよく続いたわけですよー。」

本当にそう思うよ。

ルカってどこか可笑しいし、わたしもおかしい。

空のような気がするし、話とかしなきゃ空気と思えそうな感じがした。

「そうだね。」

実のところ、絶妙なバランスでなりたっている。

こうやって、ルカと話をして居たい。

いつまでも、夢を見たいとわたしは思う。

現実のような夢。

ルカの贈ってくれたこのブレスも、この場所もどかしている。

「また、明日ね。」

ホントは、『このままだといいのにね』と言いたい。

なのに、言わない、言えない、答えない。

夜が明けて、また朝になる。

なぜか、ルカに色んな景色を見せたいと思う自分が居る。

自由じゃないと、言うなら自由にしたい。

そう思う自分が嫌だった。

もう夜明けた。

「うん、そうだね。」

今日も 世界は残酷です。

いつもの夢日常（後書き）

多分誰もが同じ夢を見ることはあると、思います。
そんなところを出会いとしてこの二人に提供。
大変な事になりそう。

少し違った日常（前書き）

がんばっています。

生存している華島です。

少し違った日常

朝は嫌いだ。

だって、忙しいし慌てないといけない。

学生というものは本当にめんどくさい。

手首を見ると銀色の鎖ブレスが其処にあった。

嫌ではない、ルカから贈ってくれた大切な物。

下に降りて、テキパキと朝ごはんを作ろうかな？

でもその前に日記を書かなきゃ。

始めて会ったときから数日後に買った日記。

ルーズリーフを60枚単位で作り置きをしている。

今日の事書いて、いつもの所に隠して置いた。

下に降りて、野菜サラダをコンソメ野菜スープに作り変える。

美味しくもないけど、ささっと飲み干す。

面倒だと思いつつも学校に行くのであった。

あ、カバンを忘れかけた。

わたしは普通の人とは色が違う。

気にはしてないし、この色のおかげでルカに会えたのなら感謝も出来るぐらいだ。

わたしを苛めたやつはよく水害や火災によく合う。

いつの間にか苛めは無くなったけど。

さて、お仕事。

学校というのは便利だ。

何時もという位に外出が出来る。

おかげで懐が暖かい。

今日もお金がたくさんだと思いながら喜んだ。
学校に急がなきゃ、ヤバイ時間になって来た。

学校はつまらない。

一部の人は楽しいけどわたしにはつまらない。

みんながみんな、赤い身の詰まった人なだけだ。

さて、どうしようかな。

明日は南の辺りで暴風警報でも出ると思っておこうかな。

それもつままないし、困った。

「つままないって顔してるね。」

誰かか、わかんない。

極彩色の女の人が居た。

黄色の服には袖は無く、袖の代わりなのだろうか

ボーダーの黒白的な物にゴムを縫い付けたような物。

赤い腰覆い、青い…意味わかんない靴下。

下の方が膨らんでいる。

こう…長袖シャツを切断して、その切断面にゴムを縫い繋げたような靴下。

ボーダーの白黒と同じものだ。

形が。

説明するに難しいこの不審者はどうして、こんなに堂々としているのか疑問だ。

携帯という高級品があれば、通報をするのに可笑しい。

髪の毛は黄土色よりも黄色く、ブロンドと言っても言い位の金色じみた色。

眼は紫。

他民族国家日本ではありえない髪色だが、眼の色が変だ。
ありえない色であるからだ。

本来は、茶色、鳶色、青色、アルビノの赤色だけである。

『ここ』の常識ならばの事だ。

夢の中には、桃色だの薄い水色とか、かなりカラフルな色がある。ここは現実だ。ここは現実のはずだ。

でないと、可笑しい。

夢もたま現実という事が証明できるんじゃないのかと自分は思う。しかし、白昼夢だったどうするんだとわたしが思う。

「あきらかに顔は動揺しているわね。」

わからない。わかりたくも理解もしたくない、少なくとも、目の前にいる存在は理解もしたくないのがわたしの現実だ。

なのに、どうしてだろうか、この事を冷静に考えてるわたしが居た。この不審者は何を考えているのだろうか。なにしにわたしの目の前にいるのだろうか。顔はという意味はなんだ。

「力をあげる。」

何の事かわからない。

言葉の一つも出てこない。

いうならば、蛇に睨まれた蛙というだろう。息苦しい。怖い。

「始まりをここに告げる。」

何をしているのが解らなかった。

どうなっているんだ。

この響きはなんだ。

なにが始まっている？。
全部が解らないの答えだ。

「最後は魂尽きるまで与えよう。」

理解が出来ない。理解の幅を過ぎた行為。
なぜ、自分がそう思うのか疑問だ。

「『破壊』をあなたに贈ります。」

するりと入る何かの塊。
なんだろうと思うわたしが居た。
危険だと思う自分が居た。

「世界はあなたを弾くまで後は何日かしらね？。」

わたしは逃げるように学校に走った。
この時、わたしと言う存在がとんでもない事になった瞬間であった。

学校に着くと席について、いつものような事が繰り返されてその通りに終わる。

今日もほぼ同じ事が終わったと言える。
帰っても一人。

お風呂に入ってご飯を適当に作る。
非日常の塊であってわたしの日常証明であるルカに今すぐにも会いたいと

思うわたしが女々しいと思った。
早く食べて、急いで自室に向かう。
いつもの音がした。

ガラスのような時計の音に銀色の時計の音。
銀色の時計は昔、祖母の家にあったものだ。
いまは祖母が死にわたしが所有者になっている。
ベットにつこつみ、時計の音を聞こうと思った。
今日は、ガラスの時計を聞く。

透き通っていてキレイ。

機械の時計もいいと思うけど、コレも好きだ。

外で大きな音がした。

よく、テレビでゲームで出てくる音。

窓を見ると、酷い事になっていた。

戦争音だ。

他民族国家日本ではありえるかもしれない。

否、ありえていて、今日の前に広がっている。

わたしにも日本系、この国の血が少しは流れている。

“逃げる”

何処に行けばいい？。

“逃げる”

何処で生きればいいのか？。

“逃げる”

どこが安全だ。

“何処にもない”

大切なものを簡単につめていく。

幸いだっただろうか、大切なものはここに集中していた。

まだ学生服のままだ。

着替えに時計二種、財布、日記、筆記用具、麻袋、ブレスレットを
詰めて地下に向かう。

地下には生活に必要な物がそろっている。

お菓子や水、食料、布団、肥料になるトイレ。

音が終わるまで待つしかなく、寝ることにした。

寝ればルカに会えると思って寝た。

「あれ?。」

不思議とこんな所に着いた。
来れた。

でも、いつもの服ではなく、学生服でした。
どうしてだろう?。

「わっ!」

「ぎゃああ!!」

なに!?

後ろを向くとルカがいた。
夜でもないのにルカに会った。

「女の子だね?。」

失礼だった。

それでも、わたしは頷いた。

「珍しいな、エルデナがこの時間にいるのはぞ。」

何かが狂った音がした。

少し違った日常（後書き）

大変な事になってきた。

変わりだしたわたし達の世界、日常（前書き）

狂いだした、変わりだした。
雛鳥は何処へ向かうのか。

変わりだしたわたし達の世界、日常

確かにわたしがこの時間からいるのは珍しい。
でも、脅かすのはどうしてだろうか。

しばらくすると笑い出した。

狂ったように笑う。

腹を抱えて棒読みごときにわらっている。

解らない。

いや、解ってはいけない。

「俺って運がいいんだ。きっと、そうだよな。」

独り言を話す。

自分を納得させるように言っている。

「あのね。俺は、明日」

何かを告げる。

何を告げるかは知らない。

でも、聞きたくないと思い感じる。

「死ぬんだ。」

殴られたような痛さを感じた。

まだ言葉が続く。

「それもさあ、斧でスパツとね?。」

笑っていて何で泣かないのかが解らない。

現実味がないのだろうか？。
理解なんてしたくない。
まだまだ続く。

「その前に麻酔やら縄やらで動けないんだー。どうしようもないよ。」

「なんでなの？」

彼はただ微笑んでいた。
近くに来る。
顔の近くまで来る。

「会えてよかったよ。」

顔が見えない。
どんな顔をしているのかが解らない。
抱きしめられて、いるのだろうか？、目の前が朱に染まっている。

「じゃあ、行ってくる。」

気が付くと彼が居なくなっていた。
行ってくるそれは、さよならだろうか。
どうしてだろうか。
わたしはどうしたらいいだろう。
解るはずがない。
一度は思い通りになればいいのと思う。
自由にしたい。
なぜそう思うのかが解らないけど。

“望め、狂え、従え”

望むのは彼の自由。

なにかどうか分からない。

“進め、狂え”

どうでもいい、起きなきゃ。

起きて『殺』さなないといけない。

起きると幼男がいた。

白い髪にコバルトブルーに白色を混ぜた瞳。

和風テイストな感じで、

袖なしワンピースにスソが斜めにびりびりで長袖のワンピース。

赤い帯がモノクロの中で鮮やかだった。

なんて濃いい今日でしょうか。

「始めてこの姿でお会いました。我が主よ。」

「誰?。」

こんな個性的な人が居たら、覚えている。

近くへ、近くへ来る。

「覚えておりませんでしたか?。」

ガツチリツと腕を持ちニヤリと笑う。

んで、そんな幼男はわたしの荷物を持っています。

「どちら様?それにその手は何・・・?。」

凄く色気のある顔になった。
紡いだ言葉は以外に

「今からお世話になりますイカレ銀時計です。
で、この手を」

紳士だった。

地下なのに風が吹く。

黒い穴が近くへと来る。

なぜか、言い様のない怖さを感じた。

自分はこんなに運が悪かったのでしょうか？。

「離すとここに残されると思いますので。」

こんなのって…こんな事ってありますか………!!。
飲まれる………!!。

黒い穴に飲まれて空中でスカイライブ中。
笑えます。

恐怖で笑えます。

「着地ってどうするのですか………!!」

そうだ、そうだよ。

ココ、重要。ここが重要。

命が命の灯火が消える………!?!。

「そんな心配はせんでもいいだろ。」

そういつつも、着々と地上もとい大地が迫っている。
銀時計…銀が右手を大地の方に向ける。

あゝ死んだ。

だって、魔法とかあるはずがない。

あつてたまるものが。

煙が立ち込めました。

あれ？どうなっているの？。

手には大地の感触がする。

眼をつぶっていたんだ。

眼をあけたら、緑が広がっていた。

ここは何処ですか？。

急すぎて解らない。

大体、わたしの知る日本にはこんな森なんてない。

「ココ何処ですか。」

幼男が笑いわたしをみる。

いつの間にか立っていてわたしを見下ろしている。

わたしは座っている。

忘れていた。

「申し遅れすぎたね。エルデナ・シンクコードって言います。」

こんな事を忘れるなんてわたしは馬鹿と思う。

相手はぼかんとしている。

「それと銀でいい？。もう一度聞くけど」

何もかも違う。

空気もこの森や草原も知らない。
だから、聞くしかないのだ。

「ココは何処ですか。」

役立たずなわたしでもいいですかとも聞きたい。
わたしはどうしようもない物なのだから。

「異なる世界、異世界だ。」

ありきたりだ。

漫画とかにありがちな話だ。
にたりと笑う銀。

「しかもだ。」

行き成りわたしに近づいておでこを指で押す。
デコピンされました。

「お主のある意味の幼馴染がおるぞ。」

知っていると云わんばかりだ。

あの時から決めていた。

力があれば、彼に色々な風景を見せれる。

わたしなんてどうでも良い。

役たたずだから、わたしなんてどうでもいい。
今すぐにも未来を見たかった。

ルカには死んで欲しくないんだ。

「そう、なら急ごう。」

わたしは立つ。

逆に銀を見下す。

幼いと感じる。可愛いと思った。

きつと、今のわたしは笑っていると思う。

「さて、まずは近場の町に行こ。」

その前に着替えないと学生服のままだ。

白いタートルネックのワンピースに赤いベスト。

黄色いリボン。

黒いブーツ。

「さて、行くぞ。」

銀の向かう方向には町が会った。

なんだか、お祭り騒ぎだった。

死ぬと言つのは、数少ない娯楽なのだろうか？。

町に入る前に角が生えた蛇が居た。

かわいい。

鞆のなかにある袋の中に入れておく。

さあ、いざルカに会いに行くよ。

変わりだしたわたし達の世界、日常（後書き）

がんばって今日中に2つを書き貯めます!!

柱と言つものは（前書き）

少女は彼の秘密を知る。

少女が求めるのは自由のはずだ。

柱と言つものは

町にはいつて噂話を聞く。
柱と言つ言葉を耳にした。

「知つてゐる？。ある亡国の人を柱の人が助けたんだつて。」

「馬鹿だよー。所詮は人形なのにね。」

気持ち悪い。

「だから、公開処刑になるんだよ。」

ル力は人形じゃない。
ル力はわたしが助けるの。

「ははっはははは！！」

黙れ黙れ黙れ黙れ。

殺そうかと言つ言葉すら浮かぶ。
駄目だ。

そんな事しても、駄目だ。
まだ、駄目だ。

「大丈夫か。」

銀が気遣ってくれるのは、解る。
けど

「大丈夫なんかじゃない。」

怒りで殺せそうだ。

こいつらの家なんて燃えて亡くなれ。
死ね。

いろんな噂が聞こえてくる。

早く明日になれば良いのに

つぎの柱は強いかなあ

どれもこれもうるさい。

うるさい。

死んでよ。

「そうか、まだ猶予はある。宿に行くぞ。」

銀に連れられ宿に行く。

不思議な事に『ここ』のお金を持っていた。
部屋に着くと怒鳴り散らかしかった。

ルカの事を馬鹿にしゃがって、何様なの？。
ルカを人形って呼ぶなんてどういふつもりなの？。

「言いたい事を言え。すつきりするぞ。」

「言わない。」

言うものか、ルカだってまだ死んでなんかない。
少なくとも今じゃない。
やれる事はとことんする。

「銀、調べるよ。」

「わかった。わしが調べる。お主はそこで待っておれ。」

つ、どういう意味なの!?!。
暗くなつて解らなくなった。

「今のおぬしには荷が重過ぎる。しかし」

外には火事らしき煙が上がっていた。
手に余る力だな。

「これはやりすぎだな。」

調べようか。

さあ、すべては我が主のために。

夢を見ている。

月が星が大地が赤い。

火、氷、氷柱、水、雷を振るう。

しまいには風すら起こす。

死にたくない。生きたくもないけど、やっぱり生きたい。
なぜにそう思つのか解らない。

解るはずもない。

鉄の匂いをする。

赤い色がする。

「嫌なの、死にたくない。」

声がする。

幼いわたしの声だと思う。

周りには人が居た。

人が死んでいる。

まるでいろんな災害あったような後がある。

溺死、焼死、感電死、凍傷、溺死。

細い棒が刺さっていたりもしている。

「生きたくもないけど、死にたくもないの。」

空は黒く澄んでいた。

月が綺麗に見えた。

「わがままで御免なさい。」

思い出した。

わたしは人殺しなんだ。

すでに赤かった。

白くなんてないんだ。

「起きたか。」

「銀。なに。」

よく解らない。

なぜ銀が女の子になっているのが解らない。
可愛いよ?。

本当に、可愛い。

「明日が公開死刑だ。明日に助けに行くぞ。」

わたしは頷く。

あの『力』を使えばいい。

「…力に溺れるなよ。」

「解っている。」

わたしは今、浮いているのが解る。
気が付いたらこうなっていた。
まずは、これから

「その前に練習するよ。」

そんな感じに今日と言つ日は終わった。

1日目完。

柱と言つものは（後書き）

力を手に、空を駆ける翼。
その身は災害で出来ていた。
と言つもの。

今、始まる。そんな気がした。（前書き）

少女は力を持つて風を助ける。

その身に宿す力は『毒』に等しいというのに。

今、始まる。そんな気がした。

銀の作ったご飯を食べ終わり、プランを読んでいた。
解りやすい解説付きだ。

この宿は安い宿泊料金でご飯とかが着いていないタイプだった。
銀の料理っておいしいな。
女として負けた気がする。

「エルデナ。お主は女の姿がいいか？。今のままで良いか？。」

「女の子でよろしく。」

銀のほうを見ると和風テイストな洋服になっていた。

…この辺りでは目立つ気がする。

にしても、魔法と言うのは便利だ。

わたしの『力』は殲滅戦に使える力だ。

手加減の具合とかを知ればもっと戦略の幅が広くなるはずだ。
接近戦ではまるで駄目だろう。

遠距離戦でボコすかと打ち負かした方がいい。

「解っているが、奴には心臓に呪爆があるのは知っているな。」

今は窓を見ていた。

銀の調べた結果だ。

逃げても無駄。

呪いがかけられていて、

自身の意思で逃げようとしたら心臓が爆発するらしい。

銀は詳しい。

その時にも見張りが一人居たらしい。

「我々は『ココ』来て日が浅すぎる。エルデナも完全には力を使いこなせていない。」

「知ってるよ。全部が全部、プランに書いてあるもん。」

そうだ。

全部、書いてあるのだ。

カバンからガラスの時計を取り出す。

「でも、これでいいのかなあ。」

わたしはル力を縛りたくない。

でも、銀の魔法で心臓を作る事ができるらしい。

それが4日後。

到底間に合わない。

だから、代用で立てないといけない。

「お主もそれで納得したではないか。」

そうだ。

それでも、複雑なんだ。

「銀、時間だよ。」

ドアを開き、野次馬に紛れて見に行く。

剣や大剣、武器系は銀が持っている。

なんでも、亜空間に入れているらしい。

わたしのカバンにもそういう機能をつけてくれました。

第一段階開始。

もう、そろそろしたら時間だ。
はあ、憂鬱だ。

エルデナに似た子を助けたただけだ。
命令違反したわけだ。
後悔はしていないと言えは嘘。
もう二度とエルデナに会えない。

「時間です。ナンバー4を処刑台まで連行します。」

逃げれない、剣で抵抗する事も出来ない。
目の前に居る埃すら払えない。
麻酔に縄に縛られて、逃げ出せるわけがない。
さらに、呪いまでかけられている。
外に出されると人魂が沢山。
ウザイ。

今すぐにも皆殺しをしてしまいたい。
俺はエルデナに会いたい。

あの薄い色素の金色の髪に触りたい。

あの赤い眼に俺が映ればいい。

ここにいるゴミを切れば、エルデナに会えるというなら切る。
こんな俺にも優しくかった。

人殺しの俺にも優しくかった。

嫌われてくない。

エルデナは白も赤も似合う。

でも、血の色は似合わない。

誰かの色に染まるなんて嫌だ。

町を抜け、処刑台がある湖へ向かう。

あと少しか。

心臓を一刺しされて、不要な死体は湖にぽちゃん。

捨てられるわけだ。

嫌になるな。

目の前には処刑台。

考え事している間に着いた。

眼に光もない処刑人、次の柱がいた。

次のナンバー4。

呪いは感染する。

槍を伝い、次の人形の心臓に住み着く。

可哀相に『力』を持っているせいで担ぎ上げられて、同情はするね。

「柱よ。汝は使命を真つ当しなかった。」

勝手いうよね、この宣言者は。

なんでも言う事を聞く異能者が欲しくてこんな事をしているのにな。
洗脳教育でも楽しく勤めているくせに何を言ってるの？。

「故に消える。」

槍が俺に向かってくる練習なんて沢山積んでいるのだろう。

事実、俺も受けた。

ミスなんて在りえない。

風が吹く。

槍が飛んでいった。

眼を開けると見慣れた赤が白が見えた。

「だったら、お前が落ちろ！」

宣言者が湖に落ちる。

この声に姿を俺は知っている。

居るはずなんてない。

権限を使ってまで探したのに居なかったんだ。

本当に別の世界に居たんだ。

本当に存在して居たんだ。

「さて、」

湖を覗きこんでいた。

音からして溺れているのだろう。

この湖には屍肉を食らう魚が居る。

流石に生きた人間は食わないとは思っけど。

「一緒に行こうか。」

> i 1 7 2 1 8 — 2 3 2 8 <

勿論、この手をとるのは当然だった。

エルデナは俺の光でもあるから。

動けたらその手を握りたい。

「ほら、大丈夫だよ。ルカ。」

痺れが消え、縄の感覚が消えた。

握れる。

「そつちの子も来る気あるのね。」

振り向くとこっちに近づく俺の元部下。
良い子ちゃんだもんな。

「行くよ。ルカに無愛想な子。」

それは失礼だろうと思いつながらも、笑った。
心底から笑えた気がした。

遠く、遠くに飛ぶ。

黄色い煙があった。

銀、其処が落ち合い場所ね。

すっと地上に着地。

「旨く行つたな。おまけが居るが大丈夫か?。」

「大丈夫ですって、コイツはお偉いさんより俺の言う事をきくし。」

ルカ、良かった。

ほっと安心する。

でも、早く事を進めないとルカが死んじゃう。

「ごめん。ルカ、その前に呪いを解くから…」

言わないといけない。

解つていても苦しいだけ。

それだけだ。

「一度、死んでください。」

眼を大きく開き、すぐに元に戻る。
無愛想な子が睨んでくる。

「大丈夫だから、大…丈夫だから。」

「いいよ。このままじゃ呪いが発動するもんね。」

あっさりと了承してくれた。

今のわたしは泣いているだろう。

「一度でしょう？。生きるために必要って事でしょうが。」

コクコクと頷いた。

次に抱きしめられる。

「俺は良いよ。許しちゃうからさ。」

ルカの心臓のある位置に手を置いた。

銀は今、アレを握っている。

そういえばわたしって人と触った事もない。

かわりを持った事も余りない。

あの『力』を使う。

災害ではなく毒に等しいこの力を振るう。

ルカが崩れ落ちる。

糸の切れたマリオネットみたいに崩れる。

わたしは支えた。

徐々に座り込みながら抱きしめる。

でも次の瞬間に銀の握っていたアレが消えた。

「こんにちわ。エルデナ。」

わたしは泣いた。

ルカはまた抱きしめる。

「あー心配した？。コウも。」

わたしはただただ泣いた。

泣いて泣いて泣き疲れるまでに泣いた。

「はい。」

今のわたしは泣くしかなかった。

今、始まる。そんな気がした。（後書き）

少女は今はまだ泣いた。
今は泣くしかない。

これがわたしたちの反乱（前書き）

決めた。

わたしたちは全世界に対して反抗を開始します。
災害が国を襲う。

これがわたしたちの反乱

あれから3日がたった。

なので、銀がルカの心臓を作れるようにはなったのだけど。

「嫌。」

…こつ言つ事になっているのです。

いや、なんで拒否するのだと混乱するわたしを置いて話が進む。

「お前な、どうしてなのだ。」

銀の白い髪がうなだれている。

理解なんてしたくないです。

なんだか解りそうな自分が居てて、自分を殴りたいと思う。

「だって、…この方がいいから。」

あのその短い沈黙はなんですか。

何を考えたのですか。

「その時計の魔力が無くなれば、死ぬのだぞ。」

耳を塞いで聞こえないと言う仕草をする。

死が近い仕事ばかりしていたのだから感覚がずれているのだろう。

この3日間は凄く濃かった。

わたしが人殺しである事を伝えて、そんな事とルカは笑って居てて。

魚を驚掴みをしたりとかサバイバルもどきをしていた。
楽しいと言えた3日間だった。

だから、ルカは生に執着しているようでしていない。

「？。でも、エルデナと繋がっていると思うんですけど。」

死にたくない、生きたいけど何？。

生きたいと断言しない。

わたしと同じだ。

「使い魔契約か？。いや、形式が違うな。」

銀、何を考えているの？。

何をしているの？。

「どちらにしろ、ラインがあるし。今のところは現状維持でいいな。」

「

「うん。」

わたしの傍にルカが来る。

ムギユと抱き付いて、どうしようもない。

時計の音が響く。

抵抗なんて出来ない。

ルカの顔には笑顔が張り付いていた。

「で、どうするのだ。早くしないと『世界』から弾かれるぞ。」

え？。

「言えばだ、ここからルカたちからさよならだと言っている。」

つ。

嫌だ。

今更は無理だ。

そんな結末は嫌だ。

「じゃあ、世界との繋がりを切ればいいの？。」

切れば、ルカたちを連れて行けるかもしれない。

そうすればルカが外を見れる。

色んな風景を見せれるのでは、とわたしは思った。
銀の顔色が変わる。

「可能だが…、正気か。」

何かが切れた。

何かが切れた音がする。

思い出せない。

まるで記憶に霧かったような気がする。

「まあ、其処は聞かな「いいよ。」だって。」

「俺も行く。」

さらーと話が続く。

溜息が銀からした。

そっだ。

わたしはなんでもしないといけない。

「ねえ、銀。ちょっと復讐をしに行ってもいい?。」

更なる溜息を聞こえたのは言うまでもない事実である。
災害が国を襲うのは当然である。

少女の逆鱗に触れに触れたのだから当たり前だ。

「誰か、一番のお偉いさんを知っている?。」

「国王陛下かな。顔とかも覚えているけど、どうすんの。」

わたしは笑った。

国を壊そうか、そして災害を起こそうか。

この国王は笑っていた。

この日までの栄光は我々の物である。
そして、あのポンコツ共は不良品だ。
はやく見つける。

「パパ?。」

可愛い娘に息子たち。

この国は安泰そのものだ。

「こんにちわ。国王陛下。」

「なんで、こんな所に廃番がいるんだ!!。」

娘たちが居る。

なぜ、こいつが居るんだ。

近衛兵はどこにいるだ、はやく殺せ!。

「幾ら待っても来ませんよ。」

後ろから声がした。

「なっ、なぜだ!。」

白い少女だ。

につこりとしていて、天使にも見えなくはない。
だがどうしてココにいるのだ。

なぜ、我が城に居るんだ。

「お子さん、可愛いですね。でも」

天使に見えた。

よく考えてみる。

どちらも、空の使いだ。

死の使いだ。

「復讐されるなんて考えませんですよね。」

娘たちの方を見る。

血みどろだ。

「やっ。」

「なぜだ。貴様等、異能者め！?。」

なぜか、身体に火がともる。

なぜだ、なぜだ、なぜなのだ。

「これも、復讐ですよ。これから国崩しに掛かります。せめての墓標です。」

わたしの我が儘を開始します。

心に墓標を建てます。

わたしの覚悟です。

「始めようか。」

歴史はここに国が合った事を辛うじて証明している。

災害が国を飲み込んだと記されている。

しかし、それを証明する文献はなかった。

学者の間では自然発生や異能者が発生した異常気象だと論議が広がっている。

その事実解るはずもない。

「行こう。みんな。」

彼女の旅は始まった。

その火は赤く、白く夜道を照らす炎の如くである。

これがわたしたちの反乱（後書き）

国が消えた。

少女は覚悟を背負い、進む。

愚者の歩みに等しい旅路である。

外伝 3日間で濃いい出来事

でも、一番濃いいのはこの子だ。

（んゝなーにー。）

銀曰く邪竜系に入るらしい。

こんなに可愛いのになんでかな。

第一声に

（御腹空いたー。君の事食べていい？。）

おかげで、ルカがにこやかに切れて銀が止めに入って、
コウは興味深そうに見ている。

どうしようもない事だ。

あの時ほどあわてた事はない。

人を殺す事はわたしの中でも決定事項なので、

「眼の先のーと明日の10とどっちがいい？。」

（明日！）

そんな感じにお約束をしたのです。

「この恐れ知らずが。」

かわいいのにな。

唯の小さい蛇みたいなので、絵に描いた蝙蝠羽。

額には金色の球で小さい2本の角。

みたいな容姿だ。

「ほれ、銀の鎖ブレスを改造したぞ。あと、触媒の指輪だ。」

銀から、魔術や秘術やら魔道系の適正が無いと断言されました。うーんここまでファンタジーなのにな。

本当に夢みたい。

ああ、怖いぐらいに幸せだ。

この幸せを守るためなら、人を踏み台にしてまで守りたくなる。怨み恨まれて復讐のように殺されるかもしれない。

それでも、この幸せだけは守りたい。

わたしが…何を考えているの。

馬鹿。

解ってはいけない。

理解なんてするな。

思考を停止ししないとこの日々が崩れる。

「?、何。」

ルカは唯、わたしを見て笑いかけるだけ。

外伝 3日間で濃いい出来事（後書き）

前話に載せなかったのは内容が飲み込まれるからです。

外伝 これがわたしたちの反乱の裏側（前書き）

彼はもっとも優先するのは彼女だけだ。

外伝 これがわたしたちの反乱の裏側

繋がっている。

命はエルデナに握られているのはよく解る。
気持ちいい。

エルデナの気分で俺は死ぬ。

そんな事は一生かかってもありえないけど。

エルデナ、俺がどれだけ好きか知っている？。

どうしようもない。

笑わないと、エルデナが安心しないから。

この面を被ろう。

エルデナを守るためにもつと人を殺す。

エルデナが望むなら切る。

斬って斬って斬って斬り殺して、懇願しても助けてと言っても無駄だ。

さあ、あの王様の所に行こうか。

「パパ。」

ああ、子供もいたんだ。

どうでもいいや。

今の俺にできる事をこなさないといけない。

止めてって幼い時の俺が言っても止めてはくれなかった。

人を殺して生きびるしかあの時の俺は出来なかった。

エルデナにこの事を知られたくなかったな。

赤に染まって欲しくない。

だから、俺が赤く染まる。

嫌われるかもしれないのに、そんな行為をする。

だから、手袋をしている。

「こんにちわ。国王陛下。」

驚いてこちらを睨む国王陛下一同。

意味解らず、誰だろうと眼を輝かせているお子様。
馬鹿だな。

絶賛エルデナの八つ当たりに合わせているのね。
俺のためにあそこまで怒ったのだけど。

「なんで、こんな所に廃番がいるんだ!!。」

内心溜息が出る。

こんな制度のせいであんたたちが朽ちるわけだ。

そこまでにエルデナは怒り静かに復讐の炎を燃やしている。
陛下の後ろにはエルデナがスタンバイ。

「幾ら待っても来ませんよ。」

ニコツリと笑う姿は綺麗だ。

美しいとも言っだろう。

とっても、綺麗だ。

本当に本当に人を惑わせるほどに綺麗だ。

「なっ、なぜだ!。」

さて、お子さんには死んでもらわないと。

一瞬で切り刻む。

悲鳴なく、苦しむ事もなく安らかに死んでよ。

「お子さん、可愛いですね。でも」

ココまでの血の匂いが相手に伝わらない。
相手までに匂わない。

風が流れていて派手に大穴が開いているからだ。
窓とか。壁とか。

「復讐されるなんて考えませんですよね。」

ちょうど、コウがここに来た。

「終わったよ。…やつ。」

ちよつと、何こんな性格じゃないでしょうが。
それでも凄いのだが。
ぷつと笑えしまった。

「なぜだ。貴様等、異能者め!?。」

あーそれ、差別用語。

ああ怒ったよ。

冷たい何かが流れてくる。

ほんのり暖かい何かも伝わってくる。

燃えていく。

俺たちを苦しめたこの国の象徴が消えた。

「これも、復讐ですよ。これから国崩しに掛かります。せめての墓標です。」

理解が出来ない。

その後エルデナは、外側から災害を起こしながら狩りをした。

目に付く人を殺して鎖で斬って殺していった。

なんか竜が人の心臓を食っていた。

そして、呪いを作った人まで殺した。

賢者なんて言われていた、同属に属する人を殺した。

エルデナの姿が儚く見えてしまった。

「行こう。みんな。」

本当にこれから一緒に入れるんだと安心した。

外伝 これがわたしたちの反乱の裏側（後書き）

だから、俺は魅せられる。

綺麗で儚く、幻想的だったのはいうまでもない。

また落ちた。(前書き)

解らない。

理解に苦しむ。

理解なんて出来やしない。

こつ言つ事にはさー！

また落ちた。

また、空から落ちた。

嫌がらせですか。

んで、ドサクサにまぎれてルカが抱きついている。

「こう言うのっていいね。」

いや、よくない。

これは一体毎回事になるんだと理解した。
にしても、温い。

「へえー。」

コウのなんだか気の抜ける声。

頭が下になるのは仕方がないとは思っけど、コウは下を向いている。

絶景なんだろうな。

見る気なんてないよ。

根性があるな。

「もう、そろそろしたら着くぞ!!。」

チリが舞う。

…、服が汚れるね。
うん。

「ごほ。ごほ。土を食べたけど大丈夫?。」

コウに注目が行く。

馬鹿だ。

「汚染は無いようだぞ。」

着地でも、朝だ。

向こうじゃ文明の一つを連続徹夜で消したのだから疲れた。
当然だけど、その後寝たのですが、疲れているものは疲れている。

「まず、何をする？。」

意見を求める。

ル力はご飯とかいいそう。

「ご飯。」 「情報収集だな。」

あ、言った。

確かにどちらも大切だけど、まずは

「ご飯を食べよ。お腹が空いたしね。」

わたしの一言でみんなが散る。

ご飯収集のために。

わたしは…木を集めよう。

火を付けるならわたしにも出来るはずだ。

集めたのはいいけど、火を加減するのが難しい。
一気に燃え尽きちゃうし。

なんと言つか、ぼっと燃えてしまうわけだ。

「出来たけど、これはちょっとヤバイかも。」

チーム戦だと諸巻き込んでしまう。

それほどに大きな力だ。

あの災害の力の上限は理解できないし、幾つの連なる災害を使えるわけだ。

大規模の火事を起こして、上昇気流を起こして雨を降らせる。

雨は豪雨となり、雷を伴う。

河川の水が溢れて、住宅を巻き込む。

水は土砂崩れや雪崩れを誘発する。

地震や火山噴火も出来た。

…チートすぎる。

問題はわたしの身体だ。

普通の身体である事に問題がある。

体力とかに問題が有り過ぎる。

其処は銀に聞こう。

美味しそうな料理を作っていますね。ホント。

考え込んでいるうちにここまで進んでいたらしい。

あと少ししたら食べれる。

贅肉なんて付かないよね？。

油っぽい。

美味しそうだけども。

よく考えると、ルカやコウ、銀は美形だ。

わたしは童顔だし、太陽とかに弱いし。

あゝ言うなら肌が白人よりも白いのが原因です。

何ので長袖長ズボンの服装。

「出来たぞ。」

その前にその鉄板やレンガはどこから持ってきたのだろう。
これも後で聞こう。

鉄板にはお肉がステーキが乗ってて美味しそう。
ルカがフォークもどきを使って食す姿に驚く。

だって、ぐああと大きい口でパクリンちよなんですよ!!。
なんだか、食べるのも早いし、待ってよ!？。

聞きたくない、このお肉は何のお肉ですか?。

トリップだから魔物のお肉になるのでしょうか、それだけでも怖いけど。

銀がちゃんとしているよね。

うん! そうだよ!!。

「ちゃんと食える肉だぞ。」

「銀、有難う。」

怖いものは怖いんだね。

恐怖心も持っていようと。

食べ終わると講義が始まった。

なんでも、放浪するからには知識を叩き込むぞと。

「さて、今さっきわしがしたのはコレの分解だ。」

さっきまで形があった鉄板とレンガのかまどモドキが土くれになっていた。

なにげにルカやコウも興味しんしんだ。

解るけどさ。

「こう言つのが錬金術系の得意分野である。創造魔術とも言つ事も

あつたがな。」

はあ、便利そうですね。

「エルデナに解りやすく言うとコレが科学の下地だ。」

はい？、意味がとんだ。

1から5すっ飛んだ。

「化学記号の大体は錬金術師たちの発見である。ここはわかるな。」

…。

えーと、着いていけないです。

話を真剣に聞いている。

それだけだ。

「ココから覚えて欲しい肝心な所だ。」

今までの解説はきつとルカやコウが興味深そうに見ていたからだろうね。

そうじゃないと解説はしないと思うし。

「この世の神秘その他の概念は、始まりの世界に属するもので
始まりの世界はそれぞれの世界に別れ、魔術や秘術も数々に散って
いった。」

後、世界の管理人と言つのもあるぞ。」

…始まりは一つと言つ事？。

だとしたら、銀の知識は何処からなんだろうか？。

その始まりの世界は文化レベルも高いのでしょうかね。

銀って一体何者なの？。

「わしらはそれらの世界でその地の大体の技術を身に付ける事が可能だと言う事だ。」

大体ね。

夢があるようなないような。

まあ、そうそう簡単にいかないか。

「で、属性、適正を発表するぞ。」

おお!!。

前のめりになりそうだよ。

なんですか！先生!!。

「その前に放出は魔法や大体の事を指し、媒体は後天的に変質または術を使いやすくしたりや増強を意味するぞ。

後は自分強化などは入らんぞ。

では、エルデナ！」

ピク!!。

なに、驚いてんのよ。

でも緊張する。

「エルデナ、属性は『災害』 大体の属性を使えるな。あと、特性は結晶。」

大体の属性か。

嬉しいけど、嫌な予感がする。

「済まんが放出系は災害で後は駄目だな。媒体を用いて頑張れ。」

はぁ、落胆した。

隣で元気出せと言わんばかりに肩を叩いている。
ルカって優しいね。

(ガンバレーー！)

うん、水華有難う。

可愛いボイスだな。うん。

「ルカは属性と特性が『風』だな。」

…。凄いな。

一点強化だとかかなり凄くなるんじゃないの？。

「風系統なら何でも使えるな。だが、これは行き過ぎだぞ。」

??。

どういう事だろうか。
問題ありなのか。

「コウ、自分強化の素質があるぞ。頑張れ。」

「え？それだけ。…、合っていると思う。」

コウらしい結果と言う事だ。

結晶ね…。

諸心当たりがるんだよね。

ルカの心臓もどきになっているわたしの作った時計に。
これって結晶だよね。

魔力の結晶だよね。

時計の魔力が無くなればルカが死ぬ？。

「大丈夫だよ。」

大丈夫じゃない!!。

また落ちた。(後書き)

彼にはどういふ事にも問題を抱えていた。
意味するのはなんだろうか？。

どうしようもないのが最近の事（前書き）

無理無茶は前からしてきた事でもある。

どうしようもないのが最近の事

「この世界は表は安全だ。近くの町まで行くぞ。」

なるほどね。

表はですか、戦争はないんだ。

確かに安全だな。

で、いつの間に調べ上げたの？。

「錬金術、科学の世界だからそこは宜しくだ。」

おお、いいね。

ルカの顔がキラキラしている。

うん、微笑ましい。

「剣とか大丈夫なの？。」

確かに、もつともな事です。

一応は武器はあつた方がいい。

「大丈夫だ。」

よかったねー。

と言う感じに眼を見合す。

うん、このほのぼの感が欲しかったんだよね。

「でさ、エルデナは俺の事はどう思ってるの？。」

「お兄ちゃん？。」

あれ、ルカの顔が崩れた。
何、みんな、なんて顔しているの!!。

「銀がお母さんで、コウがルカの弟で、わたしが一番下かな?。」

沈黙。

辛いです。

わたし、何かしましたか?。

「そう、そうなのね。」

あれ、本当にわたし何かした?。
理解できない。

「家族を支えるのは当然の事だね。」

ねーを銀に同意を求める。
眼を合わすものの逸らすという始末。

「さて、近くの町まで行くぞ。」

ちよつと!!。

無視ですか。

ルカの背中が寂しそうでした。
わたしのせいじゃないよ!!。絶対に。

近くの町は近代的です。

レンガ造りやわたしも知っているような家もある。

「ねえ、ねえ、これすつごいよ！」

ル力はきゃきゃと飾ってある時計の中身、剥き出しの時計をみてはしゃぐ。

武器を持っている人は少ないけどいる。

悪目立ちしそうだけど、いいね。

わたしも参考書を大量購入して、作成したな。

「楽しいそうだな。」

「そうだね。銀。」

コウもキョロキョロしていてオカシイ。

違和感があるだろう。

みんながみんな、わたしたちを見ている。

わたしなんてアルビノもどきだし、銀は幼女で白髪。

ル力は蒼い眼で茶髪。

コウは…、ようするに多国籍な一行だ。

「本当に怖いぐらいに楽しいね。」

それでも、どこにもゴロッキが居るのは言っまでも無く。

わたしたちの前に来た。

汗臭い。

匂い。

「銀、この人。」

こくりと頷いていた。

厄介事だ。

「上玉だな。ちょっと、こっち来てくれねえか。」

同情します。

下品な笑いが凄い雑魚臭がします。
ルカが怒っているような気がした。

「触れないでくれる?。」

後姿だけど、かなりにつこりと笑っているのだろう。
そんな気がする。

「兄ちゃんはなんだよ。彼ちゃんできゅか?。」

「家族だよ。」

さらっと言ってみる。

気のせいかな、ルカが微かに揺れた。
どうしたのかな?。

「まあ、還れ。」

有無言わずに鞘つきの剣でなぐる。
3回連続でいい音になる。

「行こうか。うん。」

しばらく歩いて観光気分。
服装とかも全然違和感なんて無いみたい。
ポケットを探る。

なんとなく、なんとなく探ったんだ。

「銀時計が無い。」

「気づけ。アホ。」

銀、なんて事をいうの？。

「ということで別行動だ。わしを見つける。」

なあ~~~~~!!

そう言っていると居なくなった。

「…、どうしよう。」

ルカとコウを見合わせて言う。
どっちもキョトンとしていた。

「まあ、頑張ろうか!。」

ルカのニツコリ笑顔にノックアウトです。

町の外に出て相談する事にした。

「まずは、お金の問題だね。」

うーんと悩む。

わたしの力は諸広範囲。
災害級の術？です。

小回りがきかないよね。

応用に……って殺すのに特化している。
駄目じゃん。

「盗むか。駄目だね。」

でも、スリは罪になると思うし。
八方塞だ。

「悪党に泣き寝入りを貰う。」

コウ。

それっていいじゃないの。
でも、その発想は何処からだ。

「いいね。でも、ねえ。」

髪の毛が弄られている感じがした。
何でだろう。

後ろを振り向いても誰も居ない。

「こんな力の使い方とかありだね。」

「ルカ、これ以上弄らないでよ。」

お金を稼ぐそれは生活するため。
終われば探そう、銀の時計を探しましょう。

どうしようもないのが最近の事（後書き）

方角を示す銀の導き手は隠れ、

この非日常と言つ名の『日常』を送ろうか。

それも、銀の時計を見つけてからだけ。

今日の世界は平和です。(前書き)

外道とはなんですか。

わたしは外道と書いて我道と読みます。

または、自己中心とも読むと思います。

わたしらしいな、と思うのです。

今日の世界は平和です。

貯まる、貯まる。

懐が暖かい。

「ここまですれば、いいでしょう。」

どこかのマフィアからお金を盗んだ、わたしたち。

ルカが盗んだけどね。

でも、すごい。

その気になれば、透視？遠視？ができるらしい。

遠隔操作とか出来るし、その気になれば金庫を破壊して持ってくる。

「そうね。」

悪いやつから盗むのだから、良心に痛まない。

我が儘を通すわたしたちはいつかは罰に罪に溺れるのでしょうか？。

それでも、いきたい。

何処までも行きたい。

生きたい。

それがわたしだ。

「探しに行こうか。」

文字などは読めるように魔法をかけたらしく、スラスラ読める。

価値観などはきちんと紙に書いてある。

…、過保護だ。

助かるのは言うまでも無い。

「まずは…何処？」

「そうなんだよねー。」

まずは、どうすればだ。

町の中にあるように感じるのだけど。

「感で行こうか。うん。」

手がかりがない。

探すにはそれが一番。

直感で行こう。

この町の中にあるような気がするんだ。

銀の時計は確かに町の中に居る。

時計は青年を見ていた。

こう、顔をちよつと出して覗き見的な感じに見ていた。

手が細いのう。

うむ、これは綺麗に属す人間だな。

付喪神である時計には余計と言えるかもしれない感情だがそれでも『神』が着く。

従って退屈はしたくないのだ。

長時間何十年と退屈をして死に掛けた身なのだから、その辺の気遣いなのかもしれない。

問題は青年だ。

彼は絶賛付喪神の銀時計、銀が見えている。
付喪神は気付いては居ないが。

子供か。

ここは遊戯をする場ではないのになぜ居るんだ。

手元には銀時計があり、手入れをしている。
壊れそうな部品は手作業で修復をされている。
鍛冶場のような機能のある住宅みたいで。

彼自身も錬金術師だ。

いざとなれば、造れるが真剣なときはやはり鍛冶を利用している。

まあ、後すこしでこの時計の修復が終わる。

次は銃を造るか。

部品から造ってあとは手作業で組み立てすればいい。
いつもの事だ。

のんびりとした世界。

この部屋、この家が彼の世界だ。

小さな変化は銀時計。

小さな変化が子供が居る事。

そして、世界の大きな変化は災害を持つ少女の一行が居る事だ。

世界は誰もが主人公であり誰もが端役である。

「今日も晴れか、珍しい。」

少女のせいだとも言えるこの現象はなにを意味するのかは今だ解る
はずも無い。

気紛れにやってくる天災そのものだから。

彼は、そんな小さくて大きい変化をそんな物と捉えて、次の作業に

移る。

世界は意思を持って弾圧を駆けようと少女を襲うのは言うまでも無い。

嵐の前の静けさに近いものがあつた。

今日の世界は平和です。（後書き）

回る廻る周る、少女に現実が近く来る。
それでも、抗うのか流されるのかは解るはずもないのに。

絶望の歌を紡ぐのは世界か、それとも…（前書き）

発展に発展を重ねた世界。

世界は好機と見て咎人たちに裁きを下す。

どちらが絶望に包まれるのか解りやしない。

絶望の歌を紡ぐのは世界か、それとも…

多い人。

お祭りらしく、色んなものが出展されている。
そんなものどうでもいい。

「エルデナ、こっちでいいの?。」

「うん。」

解る。

感じる。

銀は、こっちだ。

なぜ解るのは解らない。

ただ歩く。

進む進む。

「オカシイな。」

なぜか、世界が歪んで見えた。

わたしの力を超えようとしている。

大地はわたしが支配している。

地震が起きないようにしている。

ここは山に囲まれて予想通りに地震が起きる絶好のところだ。
想像の超えた何かが来る?。

「ルカ、急ぐよ。」

あのお家の中にいる。

銀を返してもらうよ。

戸を叩き人が留守かどうかを調べる。
案の定、居た訳だ。

「何か用か。」

「はい。」

笑っている。

そうすれば、油断の一つはする。
相手は緩い感じだ。

「実は銀時計を落としてまして、
あなたが拾ったところを見ましたので返して頂きたいのですが。」

顔を顰める。

睨んでいる。

怪しさ全開なのかな？。

ま、後ろにはルカ、コウがいるし仕方が無いか。

「確かにあるが、待っている。」

待っているか。

嫌がらせだな。

出てきた。手には銀時計がある。
足元には銀が居る。

「ほら、後子供も返すぞ。」

…あれ？。

なんだかオカシイぞ。

「もっと、居たかったぞ。」

…、

ついつい、ルカとコウの顔をみた。

ポカンとしているや鳩に豆鉄砲をしたかのような顔になっている。
今の銀の状況を言うと

「可愛い。」

可愛いの一声なのです。

こつ、唇を尖がらせているとこや

この…蒼緑髪のスボン裾を握っている所がポイントであります。

「何を言っておる!?。」

あーだ、こーだと説教だらだら。

これもそれも可愛く見えてしまうのは当然の事だ。

（水華は可愛い?。）

（可愛いけど、どうしたの。）

ならいいや、と色んなとこに移動する。

ポリープがあつたらしく、その駆除をしている。
役に立つね。

（怖いの。）

怖いとは何が怖いかが知りたい。

解らないけど。

あれ、何が解らないのかな？。

銀と青年は仲よさそうに笑って、話していて、コウとルカはからかっている。

良いじゃないの、皆が居ればわたしはそれでいいのよ。
そうに決まっているとわたしは感じる。

「まったく、どういう関係なんだ。お前等はなんだ。」

呆れ紛れに言う言葉。

ある意味タブーな気がする。

なぜか、苦しかった。

「お互いが必要とし合って、どうかしている関係？」

なんじゃそれ、ルカが言葉にしたのがわたしも感じている答えでもあった。

よく解っていると思う。

ルカとわたしの関係がソレに近い。

依存し合う関係と思うの。

互いが互いに必要と思ってしまう関係。

寄生しあっているとも感じてはいる。

「ますます、意味が解らん。こんな子供に毒だと思いが。」

「わしは、子供ではない！！。」

…。銀。わしは無いと思うけど。

立ち話が楽しいとは思わなかった。

気が付くと異変が起きるまで話していた。
ほとんどが日常ネタでした。
大きい!？。
抑えきれない。

「な、な、な、地震か!？。」

人々が逃げまとう。

とりあえず、遠い何処かで『力』を使う。

『悪魔!』とも言われた。

何を言われてもいい、皆を守るために大を切り捨てる。

わたしは、殺戮者だ。

それ以上に何かあるの。

「急に収まったか?？。」

…、皆を守るために何でも出来るのよ。
其れがわたしなんだから。

「運が良いじゃないの。」

うまく、笑えたかな？。

解らないの。

自分でも、理解が出来ないから。

「そうだね。流石、俺の天使様だね。」

ふふ、笑ってる。

うん其れが一番だ。

嬉しいな。

でも、天使はちょっと嫌です。

「エルデナ、どうするのだ?。」

次に頭に響いた。

（世界は、人類を排する気だが。）

わたしたちが居るにそんな事をするんだ。
馬鹿だね。

後ずさりする微かな音。

何が起きたか解らない人々は平穩、日常に戻った。

「わたしが動くしか無いでしょう?。」

この世界の管理人を殺す。

其れしか浮かばない。

ああ、なんていう馬鹿な世界なんでしょう?。
歌いましょう。

世界に絶望を歌いましょう。

「お前等、子供を連れて旅をしているのか?。」

なんと言っ、的外れな事をいうのかな。

「銃を飛び道具を使う、後衛は入らないのか?。」

意味が解らないと、皆で視線を見合す。
場は騒然としているとも言っ。

「傭兵も兼ねているのだ？、5000Zでいい。」

「よし、雇う。」

銀が即答で答える。

「どうやら、安いらしい。」

物価とかは、銀任せだな。

…、どうしよ。

まあ大丈夫よね。

絶望の歌を紡ぐのは世界か、それとも…（後書き）

今日、確かに人が死んだ。

あの時と同じように沢山の肉の塊を作った。

必要とされる想いは暖かく。
(前書き)

解って、知って行動をする。
覚悟はある。

必要とされる想いは暖かく。

わたしたちは銀の言う方角に進む。

「世界のツボを押しにいくぞ。」

・・・。

正直にいうと意味が解らん。

（用は、急所に毒を差し込こんで、管理人を殺すぞ。）

なるほど。

また、殺しですか。

人は世界無くして生きれない。

だけど、世界の管理人が居なくなっても人は生きていける。
そう確信を持っているわたしがいた。

また、あの時のように人を殺さないと行けないと言う訳でも無さそうで安心した。

慣れない山道。

完全にわたしが足手纏いだ。

足首が痛い。

痛いと言う症状を『破壊』しようかとも思ったけど、却下した。
当然の事だから。

痛いと言う感覚が無くなれば死に直結するかも知れない。

だから、出来ない。

疲れと言うのを『破壊』はしているけど、身体も重い。

やっぱり、根本的には体力が無い。

どうしょ。

「はい、っと。」

!!?。

「ルカ、ちよっと、降ろしてよ!。」

足手纏いがさらに足手纏いになっちゃう。
嫌に思われたくないのに。

「嫌だ。」

つつ。

恥ずかしい、お姫様抱っこじゃん。
すごく、恥ずかしい。
こっちを向くな!。

「だって、疲れているでしょう?。」

ニツコリ、爽やか120%が似合うルカ。
本人は嬉しそうにも見えなくは無いけどさ。
重いのではという、乙女な考えがちらつく。
一応は50は無いと言っても、重いものは重いはずだ。

「俺もこの方が楽なんだ。」

息苦しくないし。

でも、でも、温いのにドキドキするし、人とこんなに密着するのも

久しぶりって。

あっこれで、二度目だった。

「いいの?。」

嫌われたくないわたしが居る。

八方美人になりたいとは違う。

わたしは銀やルカ、みんなに嫌われたくない。

少なくとも、わたしの家族には。

「勿論だよ。」

必要とされている心地よさが解ってしまったら、みんなを手放せなくなる。

何が何でも守りたくなる。

可笑しな衝動だ。

自分でもこんな感情があると思うと意外に人は捨てがたいと感じた。

「ん、お願い。」

ちよっとは、甘えてもいいよね。

なにこれ、可愛いが感想だ。

あれからは大人しくなつてピトな感じに定着。

ギョウって少し丸まって小動物な感じさえ思えて仕方が無い。

ああ、ウトウトしてきたよ。

来た来た来た。

眼を閉じ出したよ。

うっし、寝た。

可愛い。

胸とかデカイし、色々眺めれるこのアングル。

でも、女の価値は胸だけで決まるわけではない。

そうじゃない。

やば、ニヤついてきたかもしれない。

色々ヤバイ。

来るものがある。

ああ、もう駄目だ。

例えエルデナが、ロリでも、ショタでも、男でも良いかもしれない。

ヤバイ、それは駄目だ、人間として、男として色々ヤバイ。

でも、可愛いよおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおお!!。

「おい、お前、その女を置いていけ。」

しかも、俺のコートの襟を掴んでいる。

手袋もして無いので素手だ。

頬を撫でるぐらいはいいよね。

頬にキスするぐらいは・・・駄目か。

ココまでは勇気出して抱っこしているわけだし。

「無理。」

邪魔だしさ、死んでよね。

埃を払うように風で族隊を殺す。

簡単に斬首。

可愛いなあ、本当に楽しい。

「恐ろしいな。」

これが、シアワセなのかな？。

だとしたら、シアワセだよ。

必要とされる想いは暖かく。 (後書き)

大事なのはお互い。

その思いは暖かく、冷たく交じり合わない感情。
同じ想いなのに擦れ違う。

外伝、わたしのおもう所（前書き）

解らない、解らない。

感じれない、この人たちの痛みなんて解る訳もない。

外伝、わたしのおもう所

聞いて下さい。

聞いて下さい。

わたしは国を一つ潰しました。

肉の焼ける匂いも叫び声も聞いています。

なのになのに、何も思いません。

感情の欠落した人間でしょうか？。

今の自分ってどんな顔をしていましたか？。

笑っていましたか？。

怒った顔でしたか？。

無表情でしたか？。

血に濡れるのはルカやコウ、銀。

わたし以外の家族が汚れます。

わたしも汚れている。

わたしの我が儘で国を壊しているのですから。

ルカを傷つける事は許せません。

だから、わたしは壊すのです。

容認していた、黙認していたこの国の人たちを殺すのです。

まるで、氷のような感じがします。

心が氷のようで、汚れているわたし。

誰かに復讐されも仕方がないと解っています。

それでも、わたしはこの鎖で払います。

邪魔者も復讐者も、わたしたちを殺すもの、阻む物はすべて壊します。

「だから、死んで。」

また、逃げ回る子供を殺します。

単純作業と化した復讐劇。

ふー、朝も昼も夜も殺してばっかだね。

仮眠を取るぐらいしか能が無い。

あ、最近はお肉も食べれる様になりましたよ。

生肉は牛肉とか馬肉が好きですけどね。

だって、毎日が殺し、赤の日々ですもん、お肉はちょっと食べれなくなります。

「この辺り一帯は死滅した、次にいくぞ。」

赤、銀の髪が白い髪が赤に染まっている。

大量の血の匂い。

慣れてしまう。

でも、慣れない。

矛盾しているなあ。

「うん、ルカ、コウ、行くよ。」

私の眼の先にはルカとコウがいる。

二人とも獲物が赤く染まっていて顔にも血飛沫が付いている。

コートは赤を通り越して黒の色。

「はい。了解つと。」

笑顔でわたしの元に来るルカ。

ニコニコの上機嫌だ。

コウは無言で戻ってくる。

ルカの顔を凝視している。

驚くよね。

わたしもちよつと驚いた。

「ねえねえ、エルデナ。」

嬉しそうに笑顔で言うルカ。

わたしのにも嬉しいけど、何に喜んでいるのか解らない。
わたしは最低な事を言ったんだよ。
殺しなさい、と言ったのに笑っている。

「これから、ずっと一緒だよ。」

「一緒だよ。」

少なくとも、今は確実に一緒だ。
言うと、答えると、極上の笑顔に変わる。
本当に嬉しいだね。

「そうだよねえ、そうだよねえ。」

嬉しそうにクルクルと回る。

剣を手にまだ持って左手で眼を覆い回る。
狂ったように回る。

「そうだよ。」

今はね。

いずれかは、誰かと死別をするかもしてない。

そんな時が来ても、わたしはわたしらしく居よう。

たとえ、わたしがル力がコウが銀が死のうとも、わたしは笑って済まそう。

それが一番、わたしらしいはずだから。

「お前等はオカシイな。」

独り言に等しい声がコウから響く。

誰にも返事もされずに響いてく。

せめて血の跡と匂いを壊そう。

その方が、良いに決まっているからね。

「つぎは、どこを壊そうか。」

また、血路を作っていく。

外伝、わたしのおもう所（後書き）

衝動に駆られ壊すのがこの日々の日常。
白が赤に染まるなんてあつと言つ間。

異常だと気付いても後の祭り（前書き）

理解はしていた。
だけでも、魅入られた。

異常だと気付いても後の祭り

異常だ。

私がいいつらを見て感じた言葉。

この国では殺人は少ない。

族はまあ、捕縛が主流だ。

なのに赤いのは迷わずに殺した。

異常だ。

そして、危険だ。

コレを自治軍に言えばこいつらは捕縛され、裁判にかけられる。かけれたらの話だ。

その前に私が殺されるだろう。

そう予感させる。

言わなければ良い。

言わなければ、何も無い。

「どうかしたのか？。」

もしだ、私が言って自治軍がいいつらの捕縛に成功したとしよう。

そしてだ、裁判で死刑とか出たら、どうするんだ。

無理だ。

遭って欲しくも無い。

ましてや、こんな餓鬼でも死んで欲しくない。

だから、言わなければ良い。

それが罪になろうと私は言わない。

言わなければ良いんだ。

「何も無い。」

安い、格安の金で雇ってくれと言ってしまった私は従うしかない。
雇われた身なのだから当然の事だ。

「そうか、次も真っ直ぐか?。」

「ああ。」

こいつらはツギハギな構成だ。

まずは、ルカ。

大柄で血の匂いすら感じるヤバイ筋。

本音から言っても関係を持ちたくないタイプ。

無表情なコウ。

細身で大剣を振り回すアンバランス。

表情と言うのが余り感じない。

腹の中は何を考えているんだ。

赤のエルデナ。

白くて、純粹とも言つべきだ。

だが、この中では異質さ、歪なあり方を感じる。
不安定な何かを感じる。

こいつからは強烈な赤の色を連想させる。
服装には白が多いが、それでもだ。

白い髪の銀。

子供なのに奇妙な色気がある。

こう、色っぽい。

ふとした時の仕草が大人っぽく可愛い、綺麗を感じた。

どれにしる歪なんだ。

ありとあらゆる国の工芸品でも狭い部屋に置いてあるような混沌。オカシイ、可らしいぞ。

「本当に大丈夫か？」

平気だと主張する。

それでも、頭の中が掻き回られるようだ。

殺せと言う声がした。

無理だと私が言う。

それでも、殺せと声がした。

一人も殺せるわけがないだろう。
無理だと言ったら、無理なんだ。

このぐらいは自分で何とかできる。
何とかできるはずなんだ。

何でココまで、幻聴するんだよ。

ああ、嫌だ。

気持ち悪い。

きっと、高山病なんだ。

だから幻聴もするし、頭も痛いんだ。

「本当に大丈夫だ。」

大丈夫ではないが戦闘の邪魔にはならないと信じたい。
この小さな命を守ってみたいと思う。

小さい命、大人とも思わせる仕草。

どれもこれも、・・・。

ロリではない。

子供大好きとかではない。

ありえないありえない。

今の顔は絶対に真っ赤、そのものだ!!。

ああ、俺はどうなっているんだよ!？。

「落ちてるね。あいつ。」

くく、面白い。

可哀想にね。

蜘蛛の糸に絡まれて、もう離れない。

引きちぎれない。

落ちる瞬間は、心地好いものがあるわけだし。

「同情はしませんよーだ。」

笑える。

こうしてはまだまだ、目的地には遠くも近くもないのです。

「ん？ってことは」

からかって遊ぶ事もありつつ事か!。

わーい、楽しみだ。

さてとお姫様の観察を続けますか。

異常だと気付いても後の祭り（後書き）

目的地に行きたくないな。

着きたくないな。

気が付けば、その無限ループ。

世界に毒を（前書き）

世界はわがままだ。

世界は管理されている、大いなる意思によって。

世界に毒を

世界には管理人が居る。

世界をより良く導くものが居る。

世界は体だ。

生きるものは血。

大地は骨。

海が筋肉。

管理人は合っても無くても関係ない免疫細胞。

「ここが、第一のポイントだ。」

ここに軽い一発を入れればいいわけか。

わたしは、迷いなく、力を使う。

災害の力を込めた。

軋みの音。

それが広がり、やがて静まり返る。

「こんなもん?。」

だろうな。というアイコンタクト。

一方でルカと、彼が言い争いをしていた。

「ん、子供に興味津々なわけ?。」

「違うわ!?。」

餓鬼の喧嘩だ。

赤面も良い所で。
ルカも大人気ない。

「ロリ太君はお好みなのかな??。」

にしし、っと笑うどうしようもない馬鹿。
うん、ひどいけど止める気はない。
恋話?はすきなんだよ。

「ロリタくんではない!、カレルだ!!。」

不吉な名前だね。
枯れる。

うん、不吉。

「こんな調子なわけ?。」

「みたいだの。」

銀にとってはどうでもいいことらしい。
恐ろしいこと。

こいに年齢は関係ないってやつ?。

「いい加減にしろ————!!。」

世界に毒を（後書き）

そんな感じでも進む。

世界は彼女らを裁くのだろうか？。

思いの行く先（前書き）

考えるとキリがない。

幸福に制限が無いように、不幸にも制限が無い。

思いの行く先

わたしたちは、次の目的地に向かう事になっている。
考えると、アレは血管に毒を送り込む行為だ。

でも、ルカや銀、コウ、わたしを排除しようなんて

許せるわけも無い。

なら、世界なんて、死んでもいい。

この世界の住民なんて敵だし、

いずれかはカレルも敵になるんだね。

そのときが来たら、殺せば良い。

ただそれだけだ。

「どうかしたの?。」

うーん、ルカってこう、純粹さが感じて
胸キュン?する。

優しい、笑顔とか、たまらない。

ルカ本来の笑顔なんだよ。

「なんにも、さ、早く準備しよ。」

お泊りの準備。

洞窟で、一晚過ごす事になった。

銀とカレルが食料で、

わたしたちが乾燥した木の枝を拾う係り。

「了解!。」

本当に、楽しそうに笑っている。
わたしと大違いだ。

わたしは、馬鹿だからかな。

一緒に居るのに意味がある。

そう思いたい。

この時間がわたしたちにくれた贈り物。

木の枝を拾う。

この木の枝のように、

本来朽ちる物を自分の物のように手にする。

普通なら、集まるわけも無い、枝。

普通なら、会う筈の無い、わたしたち。

そして、この枝は、燃やす。

そのために拾う。

「ねえ、この蔦で拾ったコレを束ねない?。」

一回ずつ持つて行くより、束ねて持っていたほうが
効率が良い。

「いいと、思うよ。」

もし、もしだ、わたしという紐が切れたら
ルカやコウ、銀はどうなるのだろうか。

「ん、じゃ、束ねるよ。」

・・・。

というか、さ。

コウの空気、気配の無さにはわたしが困る。

「お前らって幸せそうだな。」

コウの疑問もしょうがない。

わたしも、

こんなにニコニコ幸せそうに笑っているルカを見たことは無いからね。

「当然じゃないか。」

なんせ、エルデナの傍なんだぜ!!。」

キャホーイという勢いで集めた枝を束ねて抱え込む。

ルカの集めた枝が多い。

「わたしも、持つよ?。」

ルカの枝の量は異常だ。

わたしや、コウの集めた量より上。

「大丈夫だって、

あ、二人の分も俺が持つね!。」

見えない何かで、ひったくられる。

あれ、なんだ。

「ふふふ、すごいでしょう。」

コレって便利だぜ。

手の代わりなるし、盗聴とかもできそうだし。」

すごい良い笑顔で言われても、

その答えには返答が困ります。

盗聴、すごい。

というか、乱用してていいの。

「エルデナ、声に出てるよ。」

!!。

嘘だ、嘘だよ。

声に出した覚えも無い。

「ほんとだよー。」

なななななな、なんですと。

今も、ニコニコしているに間違えない。

ああ、もう、どういう事態になってんのよ!。

「可愛いなあ、もう!。」

あのね、ルカが幸せなら、わたしは構わないよ。

構わないけどね、

あああああああ、何を言おうと思ってるの!!!。
言おうではなく、思ってるの、が正しいか!。

「早くしたほうが、いいと思います。」

たしかにね、ご飯。

「ご飯だもんね。」

ある意味、まずい飯なんて食えないもん。

「そうしょ、ルカ、はやく行こうね!。」

抗議の声がルカから聞こえたけど、
駄目なモンは駄目。

「無駄口をたたかないの!。」

つゝ、なんで、ルカに調子を崩されるのよ!。
まったく!。

「はい。」

なんか、わたし、どうかして来てる気がする。

思いの行く先（後書き）

浮かぶ、沈む。

自覚するのか、してないのか、解らずじまい。

今は、先の、未来のifを考えても無駄に等しい。

未来は、まだ、定まっていらない。

心地良い居場所（前書き）

夜の秘密の話。

狂う静かで星が輝く夜。

心地良い居場所

森の中、テント？を張っている少し外れにルカがいた。
もちろんだ。

わしが呼んだのだから。

「ねえ、何のよう。」

明らかに不機嫌。

低音な声が森に響くだけ。

「ほんと、お主はエルデナの傍が好きなのだな。」

告げると、狂い笑いが見える。

本当にこいつは使い魔に近くなってきた、かもしれん。

「うんうん、そうだよ。」

俺はね、エルデナの傍が大好きなんだ。

俺ね、もっと傍にいたい。

エルデナの横にいるのが、俺だけでいいと思うんだ。」

心底から酔っているようで、今にも大声で笑いそうだ。
いまでも小さく笑い声を上げている。

ここまでに狂うとは、エルデナに酔うまでの想いがあったのだろうか。

わしには解らない。

「何でかな。心も体も、変で変でね。
傍にいたい。」

本当に本当に俺が叫んでいるんだよ。
可笑しいじゃん。

でもでも、ってなんだっけ。
まあね

俺はエルデナの傍がいいの。」

まだまだ、酔っている様子だ。

これではエルデナを私物のように見ている気がしてならない。

「ならば聞こう。

我々を殺せばエルデナを独占できると言ったら
どうする。」

「え？

ははははは、馬鹿じゃないの？。
そんな事で独占できるとでも思っているんだ。

きつと、君らを殺せばねエルデナは悲しむよ。
俺は嫌われちゃうじゃないか。
だからさ、そんな事は出来ない。」

出来ないか。
よく理解しているものだな。

「だからこそ、
エルデナが俺のことを好きになってくれる、
その時を待つよ。」

言い終わると、楽しみだなと連発して言う。
寢床に向かって帰って行った。

どこまでに、エルデナの魔力に酔っているのが気になる。
こいつの属性、特性も風だ。
自然災害の属性を持つエルデナは、上位属性そのもの。
もともと、こいつはエルデナの事を好いていたのだろう。
それに加えて、使い魔の条件をクリアしている。
完全にイカレルよな。

「これは問題のタネだ。」

良いも悪いもこいつは、
心底からエルデナに忠誠染みたものを持っている。
こいつの最優先は自分の命よりもエルデナになっている。
解ってるのか。

お主が死ねば、エルデナは涙を流して悲しむ。

「厄介な。」

それにあの、カレルといったな。
あやつもなにがしら、わしを変な眼で見ている。
同情とかそっちの辺りならばいいのだが。

心地良い居場所（後書き）

狂う盤上の駒。

騎士は忠誠似た執着を護るべき主に向ける。
噛みあわない、歯車。

ここに居る（前書き）

自由を奪わないで
邪魔しないで
したらね。
壊すよ。

ここに居る

夜が開け、わたし達は町に着いた。
わたしは雑貨店を見ていた。

少しはいいだろうと、少しは離れてもいいだろうと思った。

ここではこの世界では殺しは罪らしい。

あの時、誰か生き残っていたのだろうか？

いや、誰かが見ていたのだろうか？

解らない事に考えても無駄か。

「水華。大丈夫？」

『だいじょーぶ、なのー!!』

水華は体に宿っていて、気付かれなかった。

でも、でもだ。

武器を奪われた。

非常に困る。

指輪はすぐに返された。

普通の指輪らしい。

銀、いい仕事をしています。

ル力たち、来るかな。

来るでしょう。

なんせ、ル力は幼馴染？で腐れ縁？？みたいな人だし。
一番付き合いが長い。

夢の中で会っただけ、そして、ずっと長い間傍に居て笑っていた。
今は、ちゃんと出会って笑っている。

わたしが居なくなれば、異常が無くなる。
だから、このまま死ねない。

さて、ここから出よう。

さて、檻を破壊しよう。

睨まれても関係ない。

貴方も死に逝くから関係ない。

「奪うなら、奪ってあげる」

命を。

命で、支払ってもらおう。

わたし達から自由を奪うなら
わたし達から誰かを奪うなら
わたし達の邪魔をするなら

殺す。

嫌な匂いだ。

でも、慣れた。

肉の焼ける匂いなんて、慣れた。
慣れって怖いね。

さて、水を被らせて、うん。

「水華、ご飯だよ」

『わーい！！』

皮を喰らい、内臓を食らう。

そして、心臓を喰らい出すだろう。

檻に触れる。

壊れる。

念じるだけで、破壊できる。

ああ、なんて便利だろう。

外に出ようか。

そういえば、カレルは、味方なのかな？
敵なのかな？

関係ないや。

カレルに直接聞けばいいから。

ここに居る（後書き）

慣れは怖い。

コレが彼女達の日常になるのか。

なんとも、思わなくなるまで近いのだろう。

聞こえない（前書き）

聞こえない

聞こえない

見えない

彼女が居ない

聞こえない

弱った。

と言っべきか。

ルカの奴は錯乱していた。

力づくで止めているが・・・。

困った。

「離して離して離して離してよ。

エルデナを探さないと、探さないと」

これはマジで、溺愛と同じぐらいだ。

心の声を聞くと、

エルデナ

の言葉、声が飛び交う。

恐ろしい。

「エルデナエルデナエルデナエルデナ。

何処何処何処何処何処何処何処何処」

ヤンデレか！！！！

怖いわ。

心臓に悪いわ！！

そういえば、この世界、国の法律について調べてなかった。

あー、あー、うん。

済まない。

言えば、矛先は、わしになるんだろうな。

うん、言えないな。

「で、コウ。」

これには、どう思う？」

コウが考え込む。

いやね、長年ルカの傍に居たのがコウだ。

ルカの大体の姿を知っているのは、コウだと思うぞ。

流石に、こいつだってエルデナに対しては猫被っているはずだし。

「解らない。」

多分、エルデナ＝安定剤？」

まさにそれではないか。

エルデナ、使い魔の手綱は持っておいてくれ。

「でさ、カレル」

カレルに対し、大剣を向ける。

うむ、わしも聞きたかったのだ。

「殺しが罪つてのは、どういう事？」

場合によってはわしも殺すぞ。

こんな状況でも慌てないカレル。

傭兵の鏡だのう。

「他国の出身が？」

それとも田舎の生まれか。

この国では罪だ。

この国での傭兵は守り、逃げの兵だ」

間違った答えではない。

聞きたいのは其処ではない。

「で、告げ口したのは御主か？」

「違う。

これでも、傭兵だ。

依頼人を売るわけにはいかない」

売る。

ようするに、傭兵でも告げ口はできると言っわけか。

この国では間違った行為だが、

わし等に対してはその対応は合っている。

万が一言えば、わしが殺しに行く。

一応は、使い魔を貼り付けている。

ルカみたいな特殊な奴ではない。

安易な盗聴、探知の使い魔だ。

それに、わしが下さなくても、ルカやコウが勝手にするだろうし

エルデナだって動く。

どう考えても、摘み、摘まれている。

よかったの。

「で、どうするんだ」

腕を組みこちらを睨む。

コウは未だに大剣を向けている。

「どうするとは？」

逃げるとか無しだぞ。

あー、ル力を止めるのには中々疲れる。

うつ伏せにして、伏せ！

という、感じの格好だぞ。

ちなみにわしは子供だ。

エルデナの魔力が低いせいでこの姿なのだ。

「はあ、この際は共犯になってやってもいい」

はあ！！

なぜだ！

傭兵と言うのは、自分の命が大事ではないのか！！

法律とか、こちらは違反して緊急事態になっているんだぞ！

「金なら無いぞ」

上乘せが狙いか。

それとも、体が目当てか。

意外に男狙いか。

どう出る、どう出るのだ。

「そうじゃない！

無償で、働いてやると、言っている！」

ワケ解らん。

まあ、伝えるかの。

(コウ、大剣を向けるのをやめろ)

(え、何故に声。うん、やめる)

こういうのに弱いんだ。
斜め上にいった。

「ねえ、ねえ、
エルデナを捕らえてる馬鹿を殺してもいい。
いいよね。いいよね」

今、それを言うんじゃない!!
せつかくの助っ人が逃げるわ。
あー、水の泡になった。
口止めすべきか。

「この際は皆殺しを勧めるぞ。
俺は、殺しには一切協力しない」

いいのか!!
もう、どうなっている。
ワケ解らん。

「いいのか?
どうなっても知らんぞ」

「構わない。急いだほうがいいんじゃないのか」

確かにな。

ル力から、退く。

その顔には笑顔がペツタリ張り付いている。

「早くしよ」

風が勢いよく嘖く。

どうでどうなれば、こんな事まで出来るんだ。
こいつは、突然変異か？

「空から観れば、解るよね。
ほら、あっちにエルデナが居るよ」

人の話を聞く気が無いのか。
というか、カレルにそれを見せていいのか。
何処まで突っ込めばいいのだ。
道を走るよりかは早いのだがな。

「こういう力もあるのか・・・」

飲み込みが早くて、嬉しいのう。

聞こえない（後書き）

お互いが支えあって生きていた。

もし、傍に居れると思つて、誰かに浚われたら？

酷く歪な関係だ。

笑っていますか？（前書き）

わたしの顔は笑っていますか？

安心するような穏やかな笑顔ですか？

上面は、笑っていますよね。

笑っていますか？

笑わなきゃ。

わたしは思う。

笑わなきゃ。

誰かに心配をかけてしまう。

笑わなきゃ。

せめて、この声が聞こえるところは、絶対に。

解らない。

武器を返してもらった。

町を火で囲む。

わたし達の

「邪魔をしないで」

また一人、殺す。

子供だけとはと、命乞いをする親。
関係なかった。

盛大な口封じなのですから、当然。
羨ましい。

こんな親の元で生まれて幸せだね。
だけど、ゴメンね。

また、三人。

自由を

「奪わないで」

何処だろう。

彼の声が響いている気がする。

わたしの名前を呼んでいる気がする。

わたしを殺そうとする人がいた。

迷わずに、切る。

鎖に『破壊』を付与して、切る。

破壊とは、否定する力だと思っている。

人格を破壊。

精神を破壊。

置き換えても違和感はない。

人格の否定。

精神の否定。

中々解りやすいよね。

わたしがルカやコウにした行為は、枷を外す行為だ。

世界と言う収容所があります。

住民は囚人。

枷は世界と住民をつなげる縁。

出入り口には、鍵がなくて世界の外には道が広がっている。

見回りさんは・・・世界の意思。

場合にとっては、無理やり外に出されたり、殺されたりもありえる。

「現実逃避みたい」

眼に映るものを全て切り伏せる。

人も動物も何もかも。

破壊活動をすれば、何処かの世界に吐き出されるんだろうな。

カレルを、どうしようか。

どうしようか。

どう、しようか？

「嘘」

急に吐き気が出る。

わたしは、カレルをどうしようと思った？

やっぱり殺そうと考えていた。

なんで、関わった人の命を軽々しく・・・

そうか仲間じゃないからか。

うん、なら納得。

雇ってるしそれなりに黙るはず。

不思議と堂々巡りする。

否定しても否定しても、また疑問が浮いてくる。

「わたしは、ここに居るのになー」。

迎えに来て欲しいよ、って言ってみる」

寂しいな。

火の燃え盛る音。

人の気配が感じられない。

あ、悲鳴だ。

あつちに、誰がいる。

わたしの家族が居る。

「エルデナー!!」

わーいと駆け寄るルカ。

犬のような尻尾と耳が生えてるように見えた。

なぜに、あの朱色のコートではなく黒コートを着ているのですか？
可愛いなあとは和んでしまう。

「ごめんよ、抱きしめたいけど・・・

コートが血で汚れてさ。

今、着てるコートには一滴でも掛かってないけどね!!」

なにやらと衝動に駆られているらしい。

んー、わたしも、ちよつとねえ。

「座って」

「ん」

忠犬!!

なんだろう。

凄くワシヤワシヤしたいです。

うん、撫でようか。

頭を撫でると、眼を細めて気持ち良さそうだ。

この柴犬な耳も撫で回したい。

コレって、幻視ですね。

なんだろう。

ル力が犬みたい。

「あのさ、コレつけて」

！？

首輪！！

慌てますよ。

そんな、首輪は！！

今さっきから犬みたいだなーって和んでいたのに、冷水にかけられたようじゃないですか！

「駄目？」

なんで、そんなつづらな眼でわたしを見るのかな……。複雑です。

「いいよ。

もっと、近くに来てね」

にこーっと花が咲くような笑顔。

なんだろう、この可愛い生物は一体。

ル力が犬のようで可愛いです。

うん、可笑的い。

中々手間取ります。

首輪とか着けたこともないし、

わたしなんてこういう奴はベルトでも手間取るのにと。こんなもんかな。

「できたよ」

いうと、何度も首輪を撫でる。

ニコニコニコニコ、可愛いです。
癒されてしまう。

「エルデナ、えーっと」

「言わなくても解るから」

本当に癒されます。

こんな状況でも、本当に。

「生存者無しだ。

何をしているこんな状況で、本当に何をしておる？」

銀の言うとおりだ。

言うとおりですけど、ね？

睨まれても、わたしやルカが怯むわけもなく
銀が呆れている。

一部始終見られていたのですね。

「なあ、銀。

奴らはバカップルか？」

失礼な！

わたしたちは

「どちらかと言うと、飼い主と犬な関係？」

それを言いますか！！

そんな趣味、わたしには無いです！！

そりゃあ犬みたいでかなり和んでいましたけどね。

この血の海の中で和んでいましたけどね。

「どうして、彼がいるの？」

笑っていますか？（後書き）

赤の中でも喜劇。

それでも、彼女たちは日常に位置づけられる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5876p/>

キセキの反乱少女

2011年11月11日12時47分発行